

令和元年度学校評価結果報告書  
(中間評価)



広島県立福山葦陽高等学校  
(定時制課程)

# 目 次

## 1 自己評価結果

(1) 令和元年度自己評価シート（中間評価）・・・・・・・・・・ 2

(2) 令和元年度自己評価シート（中間評価まとめ）・・・・・・・・ 6

## 2 学校関係者評価結果

(1) 令和元年度学校関係者評価シート（中間評価）・・・・・・・・ 7

令和元年度自己評価シート（中間評価）

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・ <input checked="" type="checkbox"/> 定・通	<input checked="" type="checkbox"/> 本・分
----	----	-----	--------------	------	------	--	---

※評価基準[A：計画はとて順調に進んでいる。 B：計画は概ね順調に進んでいる。 C：計画はあまり順調に進んでいない。 D：計画は全く順調に進んでいない。]

学校経営目標					
	達成目標	本年度行動計画	評価	理由	担当部等
1 考え抜く力の育成					
1) 基礎学力の定着を図る中で、学んだ知識を活用しながら主体的に問題を解決していく力		a) 基礎・基本の定着を図る「反復学習」を取り入れる。また、授業の終末に「本時の振り返り」をさせることで知識・技能の定着を図る。	B	まとめの時間の授業の振り返り、復習プリント等を利用した反復学習などの取り組みにより、一定の成果は表れている。クラス・学年等にはばらつきがあるためBとした。	教務部
		b) 日々の授業内容と定期考査における活用問題との一体化を図る。日々の授業で学んできた基礎的な学習内容を活用し、思考・判断・表現させることができるような考査問題を工夫し出題する。	B	各教科で教材等工夫し、思考・判断・表現させる取り組みを行っている。現時点では各教科とも通過率は目標値をわずかに下回っている。	
2) 学んだことを自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、粘り強く学び続ける力		c) 各検定の情報提供と指導を積極的に展開する。また、受検に向けた個への働きかけを更に行っていく。そして、受検希望者への個別指導及び不合格者への事後指導を教員間（教科担当及び担任等）で連携して行う。	B	放課後等利用して、個別指導を行っている。1学期は情報検定を2名受験し合格することができた。2学期以降、英語検定は9名と情報検定は4名が受験予定で指導を進めている。	教務部 進路指導部
		d) 「葦陽定時学びのスタイル」の早期実現を目指し、学習と就労の両面から支援を工夫していく。低年次から担任・保護者・JST・公共職業安定所・就労支援機関等との連携を深めていく。また、面接指導を通して生徒の実態把握に努める。	B	・卒業予定者21名の進路実現に向けて、職員の協力を得ながら、個別対応に力を入れている。 就職希望者 11名 進学希望者 9名 未定 1名 ・就労状況調査 (9/18 実施) 就労率 55.7% ※昨年同期比 0.4%減 ・「葦陽定時学びのスタイル」である学業と就労の両立へ向けての支援の充実を図っている。	進路指導部

【評価結果の分析】

- a) 国語・数学・英語で基礎力定着問題を提出し、現時点で三教科とも通過率の目標 70%をほぼ達成できている。一定の時間を取って漢字の書き取りや計算問題、英単語の復唱等、基礎的な問題の反復学習を取り入れることで定着を図るとともに、導入時における生徒の集中力を高めている。
- b) 全教科で活用問題の通過率の目標値を 55%とし取組を行っているが、現段階での通過率は平均して 50%程度である。活用問題に取り組もうとする姿勢は見られるものの、学んだことを活用し表現することを苦手とする生徒が多い。また、形式が変わることで活用問題に対応できない生徒がいる。
- c) 漢字検定の校内受験が行われなくなり、現時点で受験希望者がいない。英語検定と情報検定については放課後等を利用して個別の指導を行っており、2学期以降の受験に向け取り組みを進めている。
- d) 計画に沿って指導を進めるが、卒業予定者のうち、(出願に向けての準備が不十分なこともあり) 進路決定の動きが遅れ気味である。個々に特別な支援を要する生徒もおり、支援機関との連携も必要である。就労率は5割を超えてはいるものの、昨年度比で0.4%減の状況（1年生の就業率が前年同学年より若干低い）である。「葦陽定時学びのスタイル」確立の為、在学中の就労支援と学校への定着を図ることが必要である。

**【今後の改善方策】**

- a) 基礎・基本の定着は一定の成果を見せており、引き続き反復学習や振り返りによる取り組みを行っていく。合わせて落ち着いた学習環境づくりのため、導入時における生徒の集中力を高める取り組みの強化や、授業規律の徹底を進めていく。
- b) 学んだことをもとに、自ら思考したことを話す・書くなど表現する場面を授業の中で増やしていく。また、授業で学んだ基礎・基本をどのように活用すればよいか、活用の仕方の指導を強化していき、考査試験における活用問題の出題の仕方にも工夫をしていく。
- c) 漢字検定を含め、引き続き情報提供と個への働きかけを行っていく。受検合格者はさらに上の級をめざし、自主的に対策を行ったり、個別指導を受けたりするなど、熱心に取り組む姿勢が見られる。これらの生徒への指導に加え、初めて受検をする生徒への個別指導を手厚く行い、合格が次への挑戦につながるような取り組みを進めていく。
- d) 卒業予定者の進路実現に向け、保護者の協力を得ながら、全教職員で個別対応に力を入れていく。また、「葦陽定時学びのスタイル」である学業と就労の両立の実現に向け、個別面談等を繰り返し行うことでサポートをしていく。就労体験や授業成果発表などの取組をとおして全体の意識向上を図る。就労実態の把握とともに就労支援の取り組みを、関係機関との連携のもと行っていく。

2 前に踏み出す力の育成				
3) 周りの人との関わり合いを通して、社会性を身に付け、自らの進路を切り開いていくことができる力	e) 教職員がカウンセリングマインドをもち、生徒に自発性・自律性・自主性が醸成されるように指導する。まずは授業始め・終わりの挨拶をきちんと行う事を通じて、社会性と人間関係の基礎を構築させる。	B	・挨拶向上実績度数は、目標値より 10% 下回った。	生徒指導部
	f) 日々の登下校時における指導、教職員集団による声かけ及び担任による家庭との連携等を通して、校内でのマナーを含めた、基本的なモラルや社会性を身に付けさせる。	A	・月間遅刻数が 1 以下の生徒は目標値をクリアしている。	
	g) 学校のルールを周知し、問題行動を未然に防止する。また、問題行動があった場合は、その問題点をしっかりと理解させ、再発がないように丁寧に指導する。	B	・問題行動の発件数は前年度より 5% 減少している。	

**【評価結果の分析】**

- e) 「挨拶向上実績度数アンケート」において、「挨拶をしている」と答えた生徒の割合は 80% であった。昨年度の実績度数も 80% であり、挨拶をする生徒が一定数いることは伺える。しかし、目標値の 90% をクリアすることはできていない。
- f) 月間遅刻数が 1 以下（4 ヶ月で 4 以下）の生徒の割合は 30% であり、3 人に一人の生徒は遅刻をせずに登校できている。現段階の実績値である 30% は、昨年度の数値よりも 2% 上回っている。
- g) 前年度の問題行動発件数は 54 件であり、今年度は、51 件であった。5% 減少している結果となった。しかし、特定の生徒が複数回指導を受けるケースがあった。

**【今後の改善方策】**

- e) 今後も、自発的に挨拶ができるように指導していく必要がある。挨拶を苦手としている生徒に対しても、校舎内外で教員から積極的に挨拶をすることが効果的と考える。
- f) 社会性を身に付けるためには、きちんと毎日遅刻をせず、生活習慣を整えさせる必要がある。欠課時数が多くなっている生徒も増えているため、朝の SHR から出席をし、すべての授業に出席をするよう促していきたい。そのためにも、日々の登下校指導を通して生徒に声かけをしていく。下足箱の使い方や校内でのマナーについては、少しずつ改善されてきている。
- g) 問題行動発件数は、昨年度より減っているが、複数回指導を受けている生徒がいる。ルールを明確に伝え、継続して指導していく必要がある。その際、見える化などの工夫をし、生徒がよりルールを理解しやすいように配慮することによって、未然に問題行動を減らしていきたい。

### 3 チームで働く力の育成

4) 「体験的な学び」を通して、社会的な視野を広げるとともに、他者と協働して課題に取り組んでいくことができる力	h) PTA とも協力しながら生徒主体の生徒会行事を実施し、多くの生徒が行事に参加する中で、自己と他者を尊重する態度を育成する。行事後に生徒の感想を募り、生徒の変容をみるとともに、次の行事に反映する。	B	スポーツ大会参加生徒 85 名(115 名中)。大会後のアンケートの結果、行事に満足していると回答している生徒の割合 86.8%であった。保護者参加者のアンケート回答者 (13/21) については100%が満足という回答だった。	保健美化部
	i) 外部講師による講演や地域の文化施設を学びの場とする体験的な学習を通して社会的な視野を広げ、地域の課題を協力して解決する態度を育てる。	B	6月に3,4年次生を対象に就職・進学のための面接講座、7月に対人関係を考える講演会を外部講師を招いて開催。10月には、海外の演奏者によるクラシックの鑑賞会を開催予定。2学期末に文化施設を訪問して教科横断的な学習を検討している。	教務部 生徒指導部
	j) 身の回りの整理整頓・毎月の清掃活動・校外清掃を通して、自己有用感や美化活動・ボランティア活動への関心、意欲を高める。	B	毎月1回LHRで、または考査前、行事前に清掃活動を実施し、教室以外の場所(トイレや廊下、昇降口、久松台周辺の清掃、特別教室)の清掃にも取り組んでいる。清掃活動を通して、美化活動への関心を高めることや責任感、達成感、自己有用感を得られる場面を作っている。	保健美化部 生徒指導部

#### 【評価結果の分析】

- h) スポーツ大会後に実施したアンケートでは、肯定的な回答が 86.8%であった(昨年度 85.9%)。昨年度の反省を活かし、事前に練習をしたり、クラスごとのチーム編成にしたりしたことで、競技の進行がスムーズになった。また、誰もが楽しめる競技内容だったこともあり、クラスの親睦が図りやすくなった。その結果、満足度が高くなったと思われる。また、生徒会執行部が中心となり、競技道具の準備片づけ等を積極的に行うなど、主体的に行事へ参加している様子が伺えた。保護者にも参加して頂き、生徒の様子を見て頂いた。保護者も積極的に、飲料、昼食のパン配付を手伝ってくださり、保護者と一緒に生徒たちが喜ぶ行事を作ることができた。
- i) 外部講師を招いての講演を積極的に展開している。生徒の社会性を育成していくためにもこのような機会を設定することは有意義であると考えられる。生徒の受講態度も次第によくなってきている。
- j) 毎月1回LHRで、または考査前、行事前に清掃活動を実施している。教室以外の場所(トイレや廊下、昇降口、特別教室)も生徒を清掃に取り組みせるようにしている。生徒全員が参加する清掃活動の時間を設定し、日常的に校舎内外の美化を生徒に呼びかけることで、美化活動への関心・意欲の向上につなげている。今年度より、学校周辺の清掃活動をとり入れ、地域の一員としての自覚が持てるように取り組んでいる。

#### 【今後の改善方策】

- h) より生徒主体の行事となるように、生徒会執行部を中心に、生徒が主体的に準備する行事計画を立てる。また、生徒たちが練習できる場を設定するなど、行事前から生徒全体が盛り上がる雰囲気づくりを行う。行事当日に限らず、生徒が主体となる行事運営(準備から行事後まで)を通して、生徒同士が関わり合い、達成感や自己有用感を高められるように工夫していく。加えて、ビデオを活用して行事を記録することで、今後の改善点がより分かりやすくなるようにしていく。
- i) 学校行事として、様々な体験的な活動を仕組むことで生徒の社会的な視野を広げようとしている。ただ、体験させるだけではなく、その目的や主旨を含めて理解させた上で体験させる必要がある。這い回る体験主義に陥らないように注意しなければいけない。そして、地域の課題を協力して解決する活動をさらに工夫して展開していく必要がある。
- j) 引き続き、清掃活動から生徒の美化意識や自己有用感・ボランティア活動への関心、意欲を高めるとともに、ごみの分別等の環境へも意識・視野を徐々に広げられるような清掃活動の計画を立て実施していく。

4 働き方改革				
5) 業務改善の取組を進め、職員の在校時間を縮減する。	k) ・ 定時退校日の確実な実施を行う。 ・ 勤務時間管理システムを稼働させることで、勤務実態を把握し長時間勤務の改善につなげる。	B	4月から9月までの勤務時間外の平均が、1人当たり23時間で、目標値の20時間に達していない。	校務運営会議
	1) 校務運営会議後の連絡会を機能化させ情報の共有化を図るとともに、教職員間における日常的な情報の共有化を一層推進する	A	本年度は、数近くの教職員が転勤したこともあり、連絡会及び日常的な情報の共有化を昨年度以上に丁寧に進捗している。	校務運営会議

#### 【評価結果の分析】

k) 定時退校日には、管理職が率先して退校を呼びかけて実行するようにしている。勤務時間管理システムを稼働させることで、教職員の勤務時間管理の意識化へとつながっているのではないかと考えられる。勤務時間外の削減については、目標値には達していないが、職員の半数近くが転任者ということも影響しているのではないかと考えている。

1) 半数近くの教職員が転任者であるため、昨年度以上に情報の共有化を図るようにしている。各分掌や職員室での日常的な情報の共有化で、各種行事の運営及び生徒・保護者対応等がスムーズにできているのではないかと考える。

#### 【今後の改善方策】

k) 勤務時間管理システムへの確実な入力と呼びかけていくことで、教職員の勤務時間管理に対する意識の向上を図る。また、勤務時間が増加傾向にある職員に対しては、管理職から声かけをしていく。引き続き、定時退校日には、管理職が率先して退校を呼びかけて実行する

1) 校務運営会議後の連絡会を機能化させ更なる情報の共有化を図るために、各分掌での事前の協議と情報の共有化を一層推進するようにする。また、日常的に職員室の中で情報の共有化が図られるように、様々な事案に対して管理職からも意識的に教職員への問いかけを継続して行う。

## 令和元年度自己評価シート(中間評価まとめ)

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------------	------	------	-------	-----

## 1 評価結果の分析と改善方策

## ■ 考え抜く力の育成

## ○基礎学力の定着と活用力の育成

- 基礎学力の定着は定時制の生徒にとって喫緊の課題である。基礎・基本の定着とあわせて、授業で学んだことを活用して課題を解決していく力を育成するために、活用問題を定期考査に取り入れる取組をここ数年行っている。本年度は「思考力・判断力・表現力」のうち、特に、自らの考えや意見を表現させる取組として、「書かせる」問題を各教科で考査に取り入れている。また、「振り返りシート」を作成して授業の目標と学んだことをまとめて書かせる取組も複数の教科で進めている。その結果、書く力を育成するための活用問題の通過率は现阶段で55%を下回っており、目標値にもう少しである。しかし、生徒の中に書かなくてはいけないという意識は少しずつ芽生えてきている。
- 今後の改善方策としては、定期考査における「書かせる」問題を各教科で取り入れる取組を継続していくとともに、「振り返りシート」の活用やプリントの工夫をさらに進めていく。また、書いて表現することが、自己のキャリア形成に直結するものであるということを生徒に意識づける。

## ○キャリア形成と学び続ける力の育成

- 各種検定試験の受検に向けた取組を行っている。資格の取得は将来のキャリア設計とつながるものであり、生徒に達成感を与え、次への挑戦につながる大切な取組である。どの検定試験においても受検者数と合格者数は一桁であり、さらに受検者数を増やす取組が必要である。
- 受検者数を増やすためには、現在行っている各種検定受検に向けた情報提供と個別指導をより積極的に行うことが必要である。そして、将来のキャリア設計と関連付けた呼びかけが更に必要である。
- 卒業予定者の進路実現に向けては、組織として着実に取組を進めているところである。また、葦陽定時学びのスタイルである学習と就労の両立では、就労率が55.7%と昨年同期比で0.4%減となっている。引き続き就労に向けての支援をハローワーク等の外部機関と連携をしながら組織的に進めていく。

## ■ 前に踏み出す力の育成

## ○他者との関わりを通じた社会性の育成

- 挨拶は社会生活を営む上での基本である。挨拶をしている生徒の割合は80%で目標値の90%には達していない。しかし、定時制の生徒の多くが就労していることから、対外的に挨拶をしている生徒は一定程度いると考えられる。
- 今後は自発的に挨拶をすることができる生徒を育成していく必要がある。年度末に向けて、教職員が率先して範を示していくなどの取組をしていく。
- 遅刻者数については、前年度よりも少しだけ改善傾向にあると考えられるが、依然として遅刻の常習者は多くいる。
- これらの生徒に対して個別の指導を更に強めていくように担任、各教科担任も含めて組織的に指導をしていく。
- 問題行動については、昨年度の54件から51件とわずかであるが減少してきている。改善はしてきているが、複数回指導を受ける生徒がいる。これらの生徒について粘り強く指導を継続していく必要がある。

## ■ チームで働く力の育成

## ○体験的な学びを通じた協働性の育成

- 本年度は球技大会と運動会を合体させて実施した。保護者の参加も多くあり、生徒・保護者・教職員の親睦を図ることができた。また、2年ぶりに文化祭を復活させた。文化祭を経験している生徒が少ない中で、自分たちで工夫しながら行うことができた。保護者をはじめ100名近い関係者の参加もあり、やればできるという生徒の自信にもつながったと考える。
- 姉妹校であるワイパフ高校の生徒及び教職員と調理や英語の授業を通して交流することができた。社会的な視野をひろげるとともに、グローバルな感覚をもたせることに役立ったと考える。
- 毎月1回の一斉清掃を通して、身の回りの整理整頓や美化活動への意識を高めることに取り組んでいる。清掃の時間は協働的に取り組んでいる様子も窺える。今後の課題は、日常的に周囲の環境美化に取り組めるように、日ごろからの教員の声かけや指導が一層求められる。

## ■ 働き方改革

## ○業務改善の取組

- 9月までの時間外勤務時間の平均は23時間で、目標値に達していない。引き続き管理職からのよびかけと、職員の情報共有を推進することで協働的に業務に当たることで業務改善が図られているのではないかと考える。

## 令和元年度学校関係者評価シート(中間評価)

令和元年 10月 16日

校番	12	学校名	広島県立福山葦陽高等学校	校長氏名	小林泰崇	全・定・通	本・分
----	----	-----	--------------	------	------	-------	-----

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目指す生徒像に基づき、将来像を策定し、定時制教育を推進するための具体的な目標、指標、計画が有機的に設定されていました。特に、定期考査の国、数、英での基礎力定着問題、活用問題それぞれの通過率を評価指標とした指導計画が適切に設定されていました。</li> <li>・学校経営目標に基づき、適切な目標設定が行われ、具体的な行動計画や評価指標が適切に設定されている。</li> <li>・「葦陽定時の学びのスタイル」をつくり、全教員がその大切さを共有して進めていく計画が見て取れる。授業での振り返り等、活用問題の工夫、検定へのチャレンジ、就職や進学への指導が太く結びついていくような計画にしていき、学びのスタイルの大切さが生徒に浸透するようになればと思う。</li> <li>・目標・行動計画が客観的に評価しにくいものが多く、当然の帰結として評価もほとんどBとなっているように思われる。</li> </ul>
計画の進捗状況の評価の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的なデータに基づき、中間評価時点での進捗状況が概ね適切に評価されていました。</li> <li>・各項目において、計画に対する進捗状況を的確に把握し、評価も適切である。</li> <li>・取組みの達成度が数値化されて示されているので進捗状況がよくわかり、適切に評価されている。</li> <li>・勤務時間外の一人当たりの時間が23時間ということは、一日当たり1時間程度ということになるかと思うが、この程度ならば、緊急に対応すべきこと以外では0時間に出来るのではないかと。日常的に勤務時間を意識して業務を行って定時での退勤は可能だと考える。</li> </ul>
目標達成に向けた取組の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・年度末における目標達成につながる、計画的で、組織的な取組みがなされており、中間評価時点での適切な内容でした。</li> <li>・目標達成のため定めた行動計画に対し、適切な取組を実施している。</li> <li>・スポーツ大会やクラシック鑑賞など新たな取組みが行われており、これを通して生徒の変容が期待できる。生徒の就職や進学における課題を洗い出し、つけるべき力を明確に設定していけば、「学びのスタイル」を説得力のあるものに改善することができると思う。</li> <li>・情報検定・英語検定の個別指導が行われているが、比較的取り組みやすいを思える漢字検定の校内受験が行われなくなったのはなぜか。生徒に達成感を与えるためにも、検定に合格させるという取組みは積極的に行って欲しい。</li> </ul>
評価結果の分析の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各項目の評価の裏付けとなる具体に基づき、綿密な分析がなされ、今後の改善方策につながる概ね適切な内容でした。</li> <li>・実施状況を客観的に評価し、分析も適切にされている。</li> <li>・評価結果の分析を読むと「取組みが計画通りに行われ、且つ、その結果の数値も良好である」ということが良くわかる。適切なものだと考える。例えば、「基礎力定着問題の通過率が70%達成」に関して、おおむね達成できていればよいのか、まだ不十分で課題があるのかを「つけるべき力」の分析から示すとよいし、改善の手立てにつながると思う。</li> <li>・全体数が少ない中で、月間遅刻数や問題行動発生件数における、5%以下の変化での数値的な分析に意味があるだろうか。もっと内容に踏み込んだ分析が必要である。</li> </ul>
今後の改善方策の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価結果の分析に基づき、各項目に対応した改善方策が示され、概ね適切な内容でした。特に、生徒主体のスポーツ大会において、多くの保護者参加により、生徒、保護者、教職員の親睦が図られ、高い満足度が得られたことは、今後実施予定の文化祭等の活性化につながる適切な内容でした。</li> <li>・評価結果に対応し、改善策が適切に示されている。</li> <li>・例えば、「導入時における生徒の集中・・・授業規律の徹底を進めていく」という改善方策について、授業規律の何をどのようにするためにどのような指導をするのか、を明確にしていくことが必要と考える。多くの取組みがある中、現段階で特に必要な対策を絞り込んで指導の重点化を図ってほしい。</li> <li>・検定受験者を増加させるための個への働きかけは重要なことではあるが、学校全体としての資格取得へのモチベーションを高める雰囲気作りはどうだろうか。</li> <li>体験的な学習について、「這い回る体験主義に陥らないように注意しなければいけない。」とは、どういう意味か？</li> </ul>
総合評価	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昼間定時制ならではの機能的、機動的な取組みに裏付けられた評価結果であったと思います。特に、職員室に集う職員が情報交換を日常的に行うことで、個々の生徒状況に応じた対応がなされ、教職員集団としての教育力が発揮できていると思います。年度末に向け定時制教育の更なる充実を期待します。</li> <li>・目標の設定から達成状況の把握、分析、評価、今後の方策に至るまで、適切に実施されている。</li> <li>・全体的に、評価は具体的で適切である。今後の改善方策をより具体的なものにして進めてほしい。</li> <li>・多様で、その多くは学習習慣や生活習慣が十分でない生徒たちに対して、様々に取り組まれていることは理解でき、今後も継続した地道な実践を期待する。</li> </ul>